

パークウィンズ

【登場人物】

優(27) ※よみ→すぐる
由希(25)
競馬場の客(1~3)と子どもたち
飲み屋店員
飲み屋店主
飲み屋常連客
優の母・昌子(52)
優の妹・恵(23)
森岡(37)
猫たち

○ 福島競馬場・1階(昼)

馬券売り場。マークカード記入をしている優と由希。

由希「ご使用後はコチンというまでしっかりキャップをしめてください…」

優 「え？なに？」

由希、優に手元の油性ペンの注意書きを見せる。

由希「ほら、これおかしくない？コチンって変じゃない？普通さ、カチッとかじゃない？」

優 「え？油性ペンで書いたの？裏写ってない？」

由希「(用紙の裏を確認して) 大丈夫。これしかなかったの、ペン」

優 「え、ちょっと写ってない？ちゃんと買えるかなあ」

由希「まあ試してみようよ」

由希、振り返って対岸にある自動発売機へ。

お金を入れて馬券を買う。

そのまますぐ横のエリア、飲食店などがある方へ向かう2人。

飲食店エリア。モニターを見上げる。モニターには東京競馬第10レースの様子が映し出されている。

客1「あー。田辺またダメだったなあ。調子わりいなあ」

客2「地元開催のときは頑張ってほしいですけどねえ」

客3「食べ終わった？じゃあ食器戻してきなさい」

子どもたち、「はい」と言ってラーメンどんぶりを食器返却口へ戻す。

優 「この間当たった20万、使った？」

由希「ちょっとだけ。ほとんど貯金してる」

優 「すごいね。俺ならすぐ使っちゃうな」

由希「当たったお金100万貯めて、有馬記念で一気に賭けるの夢なんだ」

優 「すごいな。根っからのギャンブラーだね」

由希 「やるときはとことんやりたいからね」

函館競馬場メインレースのファンファーレが鳴る。モニター前に客が集まってくる。

11頭の馬たちが続々と納まり、ゲートが開く。実況の「スタートしました」という声。

客1 「あー、典またポツンしやがった！」

客2 「いいぞ、そのまま、そのままいけ！」

そんな客たちの少し後ろからモニターを見守っている2人。

馬群は最終カーブ、第4コーナーを通過し、最後の直線へ。

客1 「刺せ！刺せ——！」

客2 「そのまま！そのまま！逃げろ！」

先頭馬がゴール版を越える。ほぼ同時に2着馬、続いて3着馬も。

客1 「ダメだな典（ノリ）は。買ったら来やしねえ。二度と買うもんか」

客2 「荒れたなあ。結構配当ついたんじゃないですかねえ」

客たち、モニター前から各々別の方向へ。

モニター前に残っている由希と優。

優 「どう？」

由希 「当たった。まだ確定でてないけど」

優 「え？ほんとに？」

由希 「うん、ワイド。1000円買ったから10万くらいにはなる」

優 「え？マジ？すごくない？」

優、由希の手元の馬券を覗き込む。

由希 「荒れたからね。あー最近調子いいなあ」

優 「じゃあその金で飲みに行こうよ。きょう」

由希 「ダメだよ明日早いから。今ここで飲も。ビールおごるよ」

2人、売店へ向かう。

○置賜町・飲み屋(夜)

カウンター席で一人飲んでいる優。

優のすぐ前、カウンター内側では店主が黙々と焼き物をしている。

店員が料理を持ってくる。

店員 「山芋短冊お待たせしましたー」

優 「さいきん彼女が競馬にハマってるんだよね」

店員 「え、優さんも競馬やるじゃないすか」

優 「うん。元々俺が教えたんだけどさ。なんかすごい本気で」

店員「当たってるんすか？」

優「いや、それがさ、すごいんだよ。結構な額当てて。しかも競馬ノートみたいなやつ？付けてんだよね。当たったときはここが良かった外れたときはここがダメだったみたいな。馬券貼ってさ」

店員「すごー。熱心ですね」

優「なんか怖いんだよなあ鬼気迫るっていうか」

店員「付き合ってる長いんですか？」

優「長いよー。もう3年とかかなあ。彼女が大学生のときからだから」

店員「3年は長いすね。連れて来たことないですよね？」

優「どうだったっけな」

焼き物をしていた店主、顔を上げる。

店主「あるよ。たぶん一回だけ」

優「あ、そうでしたっけ」

店員「へえ。見てみたいなー、優さんの彼女。なんで連れてこないんすか」

優「仙台に住んでるんだよ。仕事も朝早いし。だから俺が向こう行くことはあっても競馬以外であんまりこっちは来ないんだよ。あとはうちに来るとかぐらい」

店員「ご家族も公認なんですかねー」

優「長いからね」

店員「結婚とかは？」

優「結婚ねー。まあ、たぶんするんじゃないかな」

店員「ふーん。あ、いらっしやいませー」

○ 優自宅・リビング（夜）

食卓で母・昌子が家計簿をつけている。

優「ただいま」

昌子「ああ、おかえり」

優、食卓についてテレビのチャンネルをザッピングする。

昌子「ちょうどお風呂あいたから、入っちゃいなさい」

優「うん、少し休んだら入るわ」

昌子「後がつかえてるんだから早くしてよ」

優「はいはい」

風呂上がりの妹・恵がやってくる。

優、テレビから目を離さない。かといって、夢中なわけでもない。

恵「お母さん、私家出たいんだけど」

昌子「は？なに突然」

恵「彼がね、東京に仕事決まったから、一緒に行きたいんだけど」

昌子「え？ちょっと待って。あんたお付き合いしてる人いたの？」

恵「うん。半年くらい。付き合い始めてから」

優「どうせすぐ別れるだろ」

恵「うるさいなー。お兄ちゃんはお口出さないでよ。今回はちがうの」

昌子「じゃあ、まずその彼をうちに連れて来なさい。ちゃんとお父さんとお母さんに紹介してちょうだい。それからでしょ、一緒に住むとかそういうのは」

恵 「めんどくさいなあ…。じゃあ近いうち連れてくるから、お父さんに言っといて」

昌子「自分から言いなさいよ」

恵 「やだよお父さんうるさいもん。じゃあね、おやすみなさい」

恵、自室に行く。

昌子「あの子はほんとに気分屋なんだから」

優 「何日かしたら気分も変わるだろ」

昌子「どうかしらねえ。勢いと行動力だけはあるからねえ。飽きっぽいけど」

優 「たしかにね」

昌子「あんたととは正反対。あんたこそどうすんのよ。結婚の話とか出てないの？」

優 「結婚ねー。まあ、するんじゃないの？いつかは」

昌子「するならするで早くしちゃいなさい。そういう話は男からしっかりしなくちゃ。由希ちゃんくらいの今の歳って一番大事なんだから待たせたらかわいそうよ。しないならとっとと別れなさい」

優 「別れる気なんかねえよ」

昌子「じゃあ早く結婚」

優 「話し合ってみるよ。…風呂入ってくる」

昌子「はいはい」

優、テレビを消して立ち上がり、風呂場へ向かう。

○ 中合ツイン広場(昼)

デパートとデパートの間の広場にプレハブの出店があり、テーブルと椅子が無造作に並べられている。

森岡、ベンチ端に座っている由希に、両膝の間に挟んでいた缶ビールを差し出す。

森岡「はい」

由希「ありがとうございます」

由希、缶のプルトップを開ける。

「プシュッ」という音が鳴り、少量の泡が溢れ出す。

森岡、由希の隣に車いすを固定し、自分も持っている酒を飲む。

ぼんやりと周りを見ている2人。平日の昼間だが、出店のたこ焼きを食べている家族連れや、将棋をさす中年の2人組、1人で酒を飲む者など、そこそこ人がいる。

由希「ここ、もうすぐ片方無くなるんですよ」

森岡「ああ、デパート？そうだね。夏だったかな」

由希「デパートが無くなったらこの広場も失くなるのかな」

森岡「どうなんだろうね。でも、デパート潰すんだったらじきに工事が始まるから、ここも入れなくなるかもね」

由希「もしも失くなっちゃったら、ここにいつもいる人たちはどうなるんだろう」

森岡「さあ。別の場所を見つけるんじゃないかな」

由希「見つからなかったら？」

森岡「そのときは死ぬしかない」

由希「え！…死、ですか？」

森岡「うん、死だね」

由希「比喻とかではなくて？」

森岡「…大げさな話じゃないよ。もちろん僕だって家はあるし、大体が、家族や別の居場所を持っているかもしれない。でも…居場所がない人はどうだろう。話す相手がいなくなって、上手に新しい場所も見つけられなくて。それで死んでゆく人が一定数いることも事実だよ」

会社の昼休み中らしき、制服姿の女性2人組が通り過ぎてゆく。

森岡「今日は会社は？」

由希「さぼりです」

森岡「休日ほとんど来ないよね、きみ」

由希「休日は、競馬場に」

森岡「そうなんだ。僕はギャンブル全然だめなんだよね。才能がないのかな」

由希「競馬は才能じゃありませんよ」

森岡「じゃあ何が必要なのかな」

由希「どれだけ競馬のことを考えられるか、だと思います。馬のことや騎手のこと、どれだけ長い時間考え続けるかです」

森岡「それで当たるんだったらその辺のおっさんたち、みんな当たるんじゃないの？」

由希「それは違う。競馬の、その先にあるお金のことを考えると当たらなくなるんです。お金のことじゃなくて競馬のことを考えるんです。競馬を愛するんです純粋に。当たっても外れても」

由希、缶ビールを飲み干す。

由希「さっきの居場所の話」

森岡「なに？」

由希「ちょっとわかる気がして」

由希「私、震災の時、台湾に留学してたんです。それで、あの日は風邪引いてずっと寝てて。そしたら部屋に友達に来て、日本が大変なことになってるよ、って」

森岡「そうなんだ」

由希「そう。しかも大変なのが地元だってすぐに知って。高熱だったしふわふわした気持ちで家族に連絡して。ネットで映像とか見て、台湾のニュースでも大きく取り上げられてて」

森岡「うん」

由希「それでね、ふわふわした意識のなかで思ったんです。私ってこういう星の下に生まれたんだな、って」

森岡「星？」

由希「うん。私、小さい頃から何かの中に入ることが苦手で。いつもなんでも外側から見る癖があったの。だから、あんな大変な地震が地元で起きたとき、自分がその場にいなかったことがね、すごく自然なこと感じて。ああ私ってたぶんずっとこうなんだろうなって。でも同時にすごく寂しくもなったんですよね。一生、当事者にはなれないんだなって」

たこ焼きを食べていた家族連れが去って行く。

由希「いつまでたっても「ここ」に居ることが出来ないから、死ぬことも出来ないのかもしれない」

森岡「……さっきの話とのつながりがよくわからないんだけど」

由希「うん。自分でもよくわからない。でも、あなたにこの話をしたかったんです」

森岡、黙っている。

由希「私は、あなたに助けてほしいのかもしれない」

森岡「え、なにそれ。怖いんだけど。…僕は君のこと助けられないよ。そもそも人に助けてもらおうっていう発想自体が傲慢だと思う」

由希「でも…私は、ずっと助けを求めていたのだと思う」

森岡「きみ意外とロマンチストなんだね。助けを求めるのは勝手だけど僕は助けられないし助けるつもりもないよ」

森岡、缶ビールを飲み干して車のストッパーを解除する。由希が手で持て余している空き缶を取り上げ、ゴミ箱へ持って行く。売店でまた、缶ビールを2本買い、戻ってくる。

森岡「はい」

由希「ありがとう」

2人、無言でビールを飲む。

○ 置賜町・飲み屋（夕方）

店員「いらっしゃいませー。お一人様ですか？」

由希、うなずく。

店員「カウンターどうぞー」

常連客が入って来て、由希の並び・何席か空いたところのカウンター席に座る。

店員「いらっしゃいませー。あれ、どうしたんですか」

常連「いやー昨日さ、休みだったから一日中釣りしてたんだよ。そしたらこんななっちゃって。今すげー痛い」

店員「うわあ。それ数日引かないですよ。海ですか？」

常連「うん」

店員「釣れました？」

常連「いや全然」

店員「だめじゃないっすかー」

カウンター内側で焼き物をしていた店主、顔を上げる。

店主「もし、お飲物お決まりなら」

由希「ああ、生ください」

店主「(店員に向かって) 生いっちょー！」

店員「はいー」

常連「あ、俺キリンの瓶」

店員「了解しましたー」

店員カウンターの中に入り酒をつくる。

常連「そういえばさ、最近優ちゃん見ないね」

店主「いや、来てるよ普通に」

常連「あれー？そう？なんか会ってない気がするなー」

店員、ビールとお通しのラジウム卵を由希の前に置く。

店員「お待たせいたしましたー」

由希「ありがとう」

店員、にやにやしながら常連客に近付いて行き、ビール瓶とコップをテーブル上に置く。

店員「あれじゃないですか。優さん最近帰るのが早いから」

常連「あーそっか。俺いつもは夜中だもんな来るの」

店員「そうそう。優さんも前は遅組でしたけどねー」

常連「忙しいのかな最近」

店員「違いますよー。最近マツコさんとこ行ってるんですよ絶対」

常連「マツコ？ってあのマツコ？そういやマツコも見ないな」

店員「そうそう。あの2人絶対デキてますよ。同じタイミングで店出ることとかしょっちゅうだし」

常連「えーまじで。ないだろそれは」

店員「いやいや、ありますって。だって俺買い出しでた時見たんですもん。あの2人が手つないで歩いているの。いちゃいちゃ」

店員、そう言いながら自分の両手を絡めさせる。

常連「まじかよ」

店員「アレはあのあとやってますね。絶対」

常連「やだよー想像したくねえよー。でも優ちゃん彼女いなかったっけ」

店員「いますいます。でもマンネリですよ絶対。マツコさんに乗り換えるんじゃないですかね」

常連「まじかー」

店主「おい。噂話もほどほどにしとけよ。声でけえよお前」

店員「あつすみませーん。そういえば俺今週ディズニー行くんすよ」

常連「おーそうなんだ。東京？」

由希「すみません、注文いいですか？」

店員「はい」

由希「しらすおろしとつくねください。あと、トイレって奥？」

店員「あっはい。そこの左側です」

由希「ありがとう」

由希、店の奥にあるトイレへ向かう。

店主、由希がトイレに入ったことを確認する。

店主「…あれたぶん優ちゃんの彼女だわ」

常連「えっ！」

○ 夜道～ツイン広場(夜)

どこで拾ったのか、キックボードをひきながらよろよろと歩いている由希。

ツイン広場のベンチに座る。

由希、鼻歌を歌う。鼻歌からやがて歌声に。だんだんと音量が上がり言葉ははっきりとする。

由希「ぼーおやーつーよーくーいーきーるーんだーこーのーひーろーいーせーかーいー…」

由希、歌うのを止める。静寂。
ただただ座り続ける由希。

○福島競馬場・1階(昼)

優 「メインレース、どうする？」

由希 「どうしようかなー。なんかあんまりピンと来ないから見るだけにしようかな」

優 「お、メイン賭けないの珍しいね」

由希 「見送る勇気も大切だからね。蛇足でずるずる賭けるのは良くない」

優 「さすが」

由希 「天気良いから、外で観ようよ」

2人、スタンド席へ出る。

馬場の向こうにある巨大モニターには、東京競馬場の第10レース出走前の様子が映し出されている。

由希 「だいぶ暑くなってきたねー」

優 「毎年どんどん暑くなるよね。オリンピックの頃にはどうなってるんだろ。選手とか倒れないかな」

由希 「ねー温暖化ですわねえ。でも地球のサイクル的には今は氷河期らしいけどね」

優 「ああ、前も言ってたね」

由希 「そうだっけ？」

優 「うん言ってた。すごいうれしそうに話してた」

由希 「やだ、また同じ話しちゃったね」

「スタートしました」の声と共にモニターのなかの馬群、一斉に走り出す。

2人、モニターを見つめる。

由希 「この間さ、置賜町の焼き鳥屋行って来たよ」

優 「え？」

由希 「すごい前に連れて行ってくれたとこ」

優 「ああ、十八番？」

由希 「そう。優に会うかな、びっくりするかなって思ってたけど来なかった」

優 「連絡くれればよかったのに。平日でしょ？こっちに用事でもあったの？」

由希 「連絡しないでもし会えたらまた頑張れると思った」

優 「仕事でイヤなことでもあった？」

由希 「ううん、仕事の話じゃなくて。…若い店員の子と常連さんが優の話してたよ」

優 「え、なになに？どんな？」

由希 「マツコさんという人とデキてるって。だから最近来ないんだって」

歓声。先頭馬がゴール版を越える。続いて2着馬、3着馬、そのあとの馬群も続く。

大荒れのレースに対して興奮気味の実況の声が響く。

由希 「私ね、あーそっか、それはきっと本当なんだなって思って」

優 「いや待って。ここでこういう話するんじゃなくてちゃんと話そうよ。たぶん誤解もあるし」

由希 「ううん。話さなくていいの。本当じゃないなら本当じゃないでもいいの。問題はそこじゃなくて」

優 「いや、問題はそこにあるでしょ。本当か本当じゃないか」

由希 「じゃあ、本当じゃないの？ただの噂なの？」

優 「いや、それは……。でも噂が一人歩きしてる部分もきっとあるし。…俺は由希と別れたくないよ」

由希 「そうなんだ。でもね、違うの。私が言いたいのは、その話を聞いても全然ショックを受けなかった自分がいて」

優 「え？」

由希 「全然ショックじゃなかったの。へーできてるんですかーって。人ごとみたいに」

優 「え、待って。それひどくない？俺がショックなんだけどそんなこと言われたら」

由希 「うん。ごめん」

優 「俺は由希と結婚したいと思ってる。これからもずっと一緒にいるんだって確信もある」

由希 「それは、そうすることが優にとって楽だからでしょ？私の話もちゃんと聞いてよ。……あのね、ショックを受けなかったことが本当にショックだったの。…だって、この、一緒にいた3年間が全部嘘だったみたいじゃない、それって。」

優 「そうだね」

由希 「最近たまに会っている人がいるの。男の人。私飲み屋を出たその足で、その人とよく会うところへ行って待ってた。助けてほしかつた。……でも、その人は来なかったの。夜だったから来るわけないけど。それでも奇跡に賭けたの。でも奇跡は起きなかった。そのことがすごく悲しくて、孤独で」

優 「え？それってどういうこと？俺に隠れて他の男と会ってたの？」

由希 「そう。でも連絡先も知らない。ただ、そこに行けばその人がいる、それだけ」

優 「え、ちょっと待って。話について行けないんだけど」

由希 「怒ってるの？」

優 「いや、怒ってるとかじゃなくて。混乱してる」

由希、ぼんやりと向こうある巨大モニターを見つめる。

優もつられてモニターを見る。モニターにはパドックの様子が映し出されている。

由希 「私、その人のことが好きなんだと思うの。だから。別れて下さい」

優、黙り込む。

由希、モニターをまっすぐ見つめている。

優 「……ここで結論を出すことじゃないんじゃないの？」

由希 「優は別れを切り出さないと考えたから。だから私からお願いします。別れましょう」

優 「いやだ。別れたくないよ」

由希、呆れた様子。溜め息をつき、語気を強める。

由希 「それは、一つのモノを壊して新しいモノをまた1から構築しなければいけないことが嫌なだけでしょ？」

優 「なに？」

由希 「だから、優は私と別れたくないんじゃないじゃなくて、また新しい関係を作っていくのが面倒なだけだよ。ただの怠惰だよ」

優 「なんだよそれ」

由希 「怒ってるの？」

優 「さすがに怒るよ」

由希 「怒ってるのね。そうやって自分のことを棚に上げて私のことを悪者にすれば良い。私は事実を言っているだけだよ」

由希 「優はいつもそうだよ。自分のことを客観的に見ない限り同じことを繰り返すと思う。…このままだとただの罵り合いになるだけでなにも生まれないから、私もう帰るね」

優 「待ってよ。駅まで送るよ」

由希 「いいよ。まだ最終レースが残ってる。じゃあね」

由希、立ち上がり元来た方向へ歩いてゆく。

○ 優自宅・リビング(夜)

昌子、食卓でテレビを見ている。

部屋の隅に毛布が敷かれており、その上で子猫が2匹じゃれ合っている。

優 「ただいま」

昌子 「おかえり。遅かったわね」

優 「なにこれ？」

昌子 「ん？ああ、子猫よ」

優 「それは見ればわかるけど」

昌子 「ご飯食べる？」

優 「いや、ご飯はいいや。お茶くれる？」

昌子 「はいはい」

昌子、立ち上がってお茶を淹れに台所へ。

優、テレビを見る。

テレビでは、芸人が大してうまくもないギターを弾いている。

優、視線を部屋の隅、子猫の方へ向ける。

子猫は飽きずにいつまでもじゃれ合い続けている。

(了)